

日本語の話し言葉における対人距離の調節： 対者敬語と終助詞の使い分け

木 山 幸 子

要 旨

日本語の対人的モダリティである終助詞「よ/ね/よね」が対者敬語「です/ます」と組み合わせでどのように使われるかを、話者同士の現実の親疎関係に応じて検討した。20代の若年女性同士による雑談会話を線形混合モデリングによって分析した結果、終助詞は初対面で対者敬語を用いる場合より、友人同士で対者敬語を用いない場合のほうが使われやすいことが示された。またこの選好性には、初対面か友人同士かという現実の親疎関係より、対者敬語の有無の要因のほうが強く影響していた。とりわけ、「ね」や「よね」という「ね」で終わる形式は、丁寧体より普通体の発話と共起しやすいたことが示された。その一方、「よ」にはそのような対者敬語の有無による選好性は認められず、丁寧体であるか否かとは独立して用いられるようであった。

1. はじめに

対面のコミュニケーションにおいて臨機応変に相手との対人距離を調節することは、円滑な人間関係の維持のために不可欠である。表情や身ぶりなどの非言語行動とともに、言葉も、相手との可変的な対人距離を把握する手がかりとなる。日本語（とりわけ話し言葉）において、対人距離を調節するために大きな役割を持つ言語形式は、「です/ます」等の対者敬語（addressee honorifics）と「よ/ね」等の終助詞といった対人的モダリティ（addressee modality）であると考えられる。対者敬語は、上下関係であれ親疎関係であれ、話し手と聞き手の間に距離を置く遠隔化の機能があり、基本的には現実の人間関係を反映する（時枝, 1951等）。この対者敬語が目上や初対面の相手に対して使用必須の固定的な「閉じられた表現系」である一方、終助詞は「開かれた表現系」であるといえる（滝浦, 2008等）。終助詞は、現実の人間関係にかかわらず、一時的な話し手の見なし方によって対人距離を近づけることも遠ざけることもできるからである。

終助詞は、命題内容について話し手と聞き手の関わり方を示すモダリティ形式であるとされ（井上, 1999；神尾, 1990；加藤, 2004；益岡, 1991；時枝, 1951；滝浦, 2008など）、各終助詞の複雑な用法について、話し手と聞き手の相互作用といった観点から体系的な説明が試みられてきた¹。そのなかで滝浦（2008）は、話し手と聞き手のそれぞれにプラスとマイナスの素性を与え、それらの組み合わせによって終助詞の機能を以下のように説明している。

プラスの素性：当該の情報が話し手または聞き手の管理下に {現にある / あるべきだ / あると見なす / etc} という話し手の構え

マイナスの素性：当該の情報が話し手または聞き手の管理下に {現にない / あるべきでない / ないと見なす / etc} という話し手の構え

この枠組みに基づいた基本的な終助詞の素性と機能は、表1のように指定される。この組み合わせは、各終助詞の素性において、話し手が聞き手か、またプラスかマイナスかのいずれか一方のみを担っている点に特徴がある。例えば、「よ」は話し手プラスの素性が指定されていても、聞き手マイナスの素性が指定されているわけではない。これにより、連接形について矛盾のない説明が可能となる。すなわち、「よね」は、「よ」によって話し手が一方的に言明した命題を「ね」で聞き手に共有を促すが、反対に、先に「ね」で相手に共有や確認を促しておいてから「よ」で話し手が一方的に言明するというプロセスは考えられない²。このように、「ねよ」という連接形が不可能であることもこの枠組みで説明できる。

表1. 終助詞「よ/ね/か/な」の弁別素性と機能（滝浦，2008）

	+	-
話し手	「よ」：話し手の一方的言明	「か」：話し手の判断保留・判断放棄
聞き手	「ね」：聞き手の共有の確認促し	（「な」）

このような終助詞と「です/ます」などの対者敬語との使用は統語的には相互に独立しており、「よ/ね」は「です/ます」を付ける敬体とも付けられない常体とも任意に共起できる（表2）。これら2つの表現系の組み合わせによって、日本語話者は、現実の人間関係は距離があるものの一時的に親近感をもたらしたり、逆に親しい関係でありながら一時的に距離を置いてみたりなど、文脈に応じて自在な対人距離の調節を図っていると考えられる。

表2. 対者敬語と終助詞の組み合わせ例

	Ø	です/ます
Ø	そうだ。	そうです。
よ	そうだよ。	そうですよ。
ね	そうだね。	そうですね。
よね	そうだよね。	そうですよね。

終助詞に対人距離を操作する機能があるというのなら、現実の話者たちの間柄が近いものかどうかによって終助詞と対者敬語の共起に選好性があるだろうか。中西（1993）は、終助詞「ね」は親しい間柄や普通体（ダ体）と相性がよく、「よ」は親しくない間柄や丁寧体（デスマス体）と相性がよいという基本的性格を指摘している。しかし、丁寧体が普通体かというスピーチレベルが実際の話者たちの間柄を直接反映する（Martin, 1964；大石, 1975；滝浦, 2005, 2008；時枝, 1939 など）のとは異なり、終助詞には、話す相手に応じた使用上の制約があるわけではない。終助詞が話者たちの間を遠ざけたり近づけたりする機能を持つのであれば、現実の間柄がどのようであっても各終助詞を自由に駆使することができるとも考えられる。

それぞれの終助詞が選好するスピーチレベルがあるかどうか、そのいずれであっても、終助詞と現実の人間関係や対者敬語との相互作用という問題は、終助詞の対人的機能を考えるために重要な視点を提供している。Maynard（1993）や加藤（2010）が対話における終助詞の出現頻度を報告しているが、対者敬語との共起の選好性を検討できるものではない。そこで本稿では、初対面と友人同士の

会話資料から、日本語の話し言葉でもっとも頻出する終助詞「ね」、「よ」、およびそれらの接続形の「よね」の使用が対者敬語「です/ます」および現実の親疎関係（初対面か友人同士か）とどのように共起しているかを調査した。

2. 方法

木山（2005）で収録された20代の大学生女性二者間の雑談会話30会話の文字化資料から終助詞を検索し、対者敬語との共起関係を分析した。

2.1. 会話協力者

会話録音に協力したのは、東京の大学に在籍する学部および大学院生の日本語を母語とする女性60名であった。半数が親しい友人同士の雑談、残りの半数が初対面の相手との雑談に参加した。友人同士の場合には、会話の一方の話者に自由に会話相手を選んで連れてきてもらい、初対面会話には収録者が両者を引き合わせた。会話協力者たちの年齢は、友人同士の会話に参加した30名の平均が22.2歳（標準偏差1.9）、初対面の会話に参加した30名の平均が23.1歳（標準偏差2.4）であった³。これらの話者の年齢の差は有意ではなかった（ $t_{58} = 1.556$, $p = 0.125$, $ns.$, $d = 0.402$ ）。会話収録は、固有名詞を伏せた上で研究目的での内容公開に対する書面での同意を得てから行い、協力に対して謝礼が支払われた。

2.1. 会話の概要

この会話資料は、親しい友人同士と初対面同士の会話15会話ずつで構成されており、総会話時間は約10時間であった。会話時間は、友人同士15会話の平均が21.1分（標準偏差5.7）、初対面15会話の平均が19.2分（標準偏差4.8分）であり、これらの両会話時間の差も有意ではなかった（ $t_{28} = 0.972$, $p = 0.339$, $ns.$, $d = 0.355$ ）。発話された文の総数は、友人同士15会話の平均が526.6文（標準偏差155.0）、初対面15会話の平均が558.7文（標準偏差189.4）であり、この差も有意ではなかった（ $t_{28} = 0.509$, $p = 0.615$, $ns.$, $d = 0.186$ ）。

2.3. 検索

2.3.1. 終助詞

文字化資料を読みながら、発話文の末尾にある「よ/ね/よね」の各終助詞を抽出した。基本的には、(1)のように文の終了を示す「。」の直前に表れている終助詞を対象とするが、(2)のような倒置と判断できる文も抽出の対象とした。

- (1) 人事も大変だね。[友人同士の会話13]
- (2) 最初公務員だったしね、志望。[友人同士の会話1]

2.3.2. 対者敬語

終助詞が含まれている文について、丁寧体で用いられているかそれ以外（普通体および判断できない中途終了型発話など）に分類した。丁寧体は、(3)のように述部に「です/ます/ございます」などの対者敬語が含まれる文、普通体は述部が完結しているものの中で「です/ます/ございます」な

どの対者敬語が含まれない文とした (4)。

(3) 60 キロまで出るんですよ。[初対面同士の会話 7]

(4) え、行ったことないからね、様子が分かんないんだよね。[友人同士の会話 10]

丁寧体と普通体のいずれにも判断できない文としては、(5) や (6) のように、述部が含まれない発話、終助詞のみから成る発話などがあつた。

(5) あ、なるほどね。[初対面同士の会話 10]

(6) ね。[友人同士の会話 8]

2.4. 分析

本稿の目的は、終助詞「ね」、「よ」、およびそれらの接続形「よね」のそれぞれが、対者敬語と現実の人間関係に応じた選好性の有無を明らかにすることである。そこで、上述の会話資料の各参加者の全発話文において、上記の各終助詞の形式が、対者敬語あり（丁寧体、ですます体）の環境と対者敬語なし（普通体、だ体等）の環境、また初対面同士の会話と友人同士の会話とで出現比率が異なるかどうかを検討した。二者間の雑談資料というデータの性質上、各参加者にはそれぞれの会話相手が固定されており、また各会話で取り上げられていた具体的な話題や雰囲気などは自ずと異なっていた。そこで会話固有の影響や参加者個人の特性の終助詞使用への影響を排除するために、線形混合効果モデル (linear mixed effect modeling; Baayen, 2008 など) を用いて、研究目的である終助詞の種別（「よ」「ね」「よね」）、親疎関係（初対面か友人か）、および対者敬語の有無の3つを固定効果とし、各会話と各参加者の2つをランダム効果として、「よ」「ね」「よね」の出現比率を分析した。分析には、R ver. 3.0.2 に搭載されている統計パッケージ lme4 (Bates, Maechler, Bolker, & Walker, 2014) と lmerTest (Kuznetsova, Brockhoff, & Christensen, 2014) を用いた。標準化偏回帰係数 (β) を得るために、すべての量的変数を標準化した。有意 (α) 水準は 0.05 とした。

3. 結 果

本稿が対象とした雑談会話において終助詞が用いられる比率は、「よ」（接続形を含まない単体での使用）が平均 1.9%（標準偏差 2.6）、「ね」（単体使用）が平均 4.0%（同 4.3）、接続形の「よね」が平均 2.5%（同 3.1）、合計で 8.4%であった。線形混合効果モデルによる分析の結果、この終助詞種別（「よ」「ね」「よね」）、親疎関係（初対面か友人同士）、および対者敬語の有無のすべての主効果が認められた（表 3）。終助詞の中では、「よ」が他の「ね」を含む形式（「ね」および「よね」）に比べて使用比率が低いことが示された（図 1）。また、親疎関係と対者敬語の交互作用、および親疎関係と対者敬語と終助詞「よ」の交互作用が有意であった。前者の交互作用は、終助詞が概ね初対面で対者敬語を用いる場合より友人同士で対者敬語を用いない場合のほうが頻出するが、この終助詞使用に対する選好性には親疎関係より対者敬語の有無のほうが強く影響していることを示している。後者の交互作用は、上記の傾向が「ね」を含む形式（「ね」「よね」）において顕著であり、「よ」単体使用の場合にはその傾向は低かったことを示している（図 1）。

表 3. 終助詞の出現比率に与える終助詞種類、対者敬語、会話種別の固定効果
(線形混合効果モデルによる)

対比	標準偏回帰係数: β [95% 信頼区間下限, 上限]	t	p
(切片)	0.205 [-0.034, 0.445]	1.684	0.093
親疎関係	0.984 [0.645, 1.323]	5.708	<0.000
対者敬語	0.950 [0.612, 1.288]	5.522	<0.000
終助詞「よ」	0.459 [0.120, 0.797]	2.667	0.008
終助詞「ね」	0.317 [-0.021, 0.655]	1.844	0.066
親疎関係 * 対者敬語	2.008 [1.530, 2.486]	8.251	<0.000
親疎関係 * 終助詞「よ」	0.436 [0.042, 0.914]	1.792	0.074
親疎関係 * 終助詞「ね」	0.335 [0.142, 0.814]	1.378	0.169
対者敬語 * 終助詞「よ」	0.103 [-0.374, 0.581]	0.422	0.674
対者敬語 * 終助詞「ね」	0.189 [-0.667, 0.289]	0.777	0.438
親疎関係 * 対者敬語 * 終助詞「よ」	1.235 [0.559, 1.911]	3.589	<0.000
親疎関係 * 対者敬語 * 終助詞「ね」	0.496 [-0.180, 1.172]	1.441	0.150

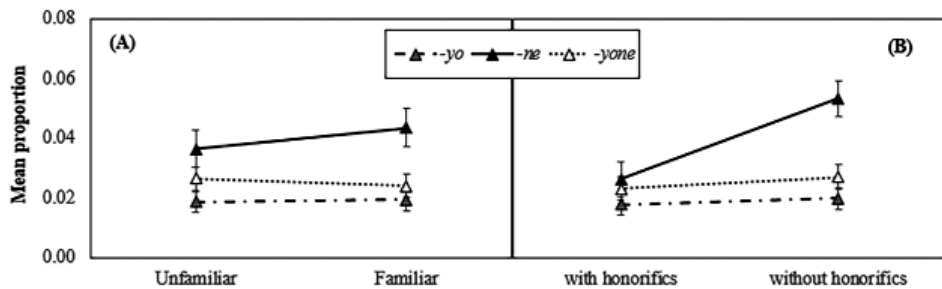


図 1. 終助詞「よ」「ね」「よね」の人間関係および対者敬語の有無に応じた使い分け

注：(A) 親疎関係（初対面；友人同士）、(B) 対者敬語の有無。誤差範囲は 95% 信頼区間を示す。

4. 考 察

本稿では、親疎関係と対者敬語の有無に応じて日本語の終助詞「よ」と「ね」に選好性が見られるかどうかを確かめるために、20 代の若年女性による雑談会話資料における終助詞「よ」「ね」「よね」の出現比率を、初対面と友人同士とで対者敬語の有無に応じて比較した。全般に、20 代女性の雑談会話の約 1 割にこれらの基本的な終助詞が現れており、日本語の話し言葉において終助詞「よ」と「ね」が大きな位置を占めていることがうかがえる。

線形混合効果モデルによる分析の結果からは、まず、終助詞は初対面で対者敬語を用いる場合より、友人同士で対者敬語を用いない場合のほうが使われやすいことが示された。またこの選好性には、初対面か友人同士かという現実の親疎関係より、対者敬語の有無の要因のほうが強く影響していた。こ

のことは、必ずしも対者敬語が現実の親疎関係に対応して使われているわけではないことを示唆している。初対面であってもときには普通体や中途終了型発話を用いること、反対に友人同士であってもあえて丁寧体を用いることはしばしばある。とくに本稿で用いた会話の参加者らは、全員同一大学に所属する同年代の女性の学生同士であったため、初対面の場合でも会話によってはしだいに両者の親近感が高まり丁寧体が用いられなくなることがあった。

さらに、線形混合効果モデルによる3要因の交互作用は、終助詞の種別（「よ」か「ね」か）によって、親疎関係や対者敬語の有無に応じた選好性のあり方が異なることを表している。「よ」で終わる形式がその他の2つと異なるふるまいをすることが示されており、図1からわかるように、親疎関係や対者敬語の有無による効果が認められない。その一方、「ね」や「よね」のような「ね」で終わる形式は、丁寧体がない発話を選好することが示された。この結果は、中西（1993）の、終助詞「ね」は親しい間柄や普通体と相性がよいという指摘を支持している。しかし、終助詞「よ」は親しくない間柄や丁寧体と相性がよいという予測は、本稿の分析結果とは一致しておらず、現実の親疎関係や丁寧体の有無とは独立して用いられるようであった。

「よ」の素性は「話し手+」であり、「話し手の一方的言明」がその基本的用法である（滝浦，2008）。親しい間柄であるからこそ、相手に「話し手の一方的言明」をすることが許される面もあるだろう。たとえば以下の会話例は、親しい友人同士で「よ」が多用されている場面である。

会話例1 [友人同士の会話10]

ライン	話者	発 話 内 容
242	IF19	なんか、なんか最近忙しいんだよ。
243	IF19	バイトと、部活で<笑い>。
244	IF20	<笑い>。
245	IF20	いいじゃん、バイトと部活なら。
246	IF19	超忙しいんだよ。
247	IF19	卒論全然できないんだもん。
248	IF20	あーそ、そうだよねー、卒論…。
249	IF19	そうだよ。

ライン242、246、249で、話者IF19は自分の忙しい近況を伝えている文脈で「よ」で終わる発話を多用している。このような自分の苦しさを遠慮なく訴えることができるのは、親しい間柄ならではのいえるだろう。

一方「ね」や「よね」のような最末尾に「ね」が置かれる発話は、丁寧体とは相性が良くないことが示唆されている。以下は、親しい友人同士で「ね」および「よね」で終わる発話が連続している場面である。話者IF03が、教育実習中に生徒に物をくれると言われたのを辞退した後のやりとりで、話者2人とも「ね」と「よね」を使っている。「よね」という連接形式は、「話し手+」と「聞き手+」の組み合わせであるから、自分も相手も包摂することができ、「ね」単体よりもさらに共感をもたらす効果が高いのかもしれない。

本稿では、終助詞「よ」と「ね」の対人的機能について、親疎関係および対者敬語との共起関係に応じた使い分けを分析し、「ね」や「よね」のように「ね」で終わる発話が親しい間柄の普通体と相性

会話例 2 [友人同士の会話 2]

ライン	話者	発話内容
184	IF03	もらえばよかった <u>ね</u> <笑いながら>。
185	IF04	<笑い>。
186	IF03	気前いい <u>ね</u> <笑いながら>。
187	IF04	気前いい <u>よ</u> <u>ね</u> <笑いながら>。
188	IF03	そこでほんとに、“ちょうだい”って言ったら、びっくりするかも <u>ね</u> <笑いながら>。
189	IF04	<u>ねー</u> <笑いながら>。

がよいという示唆を得た。ただし、その論拠とした資料は若年層の女性同士の雑談に限られている。男性の会話やより年齢層の高い話者の会話資料を用いて追試検証する必要がある。また本稿では、終助詞と実際の間人関係の関連を分析する際に、友人同士か初対面かという親疎関係のみに着目したが、年齢差や地位の差といった上下関係と終助詞使用にどのような関連が見られるかといったことも検討が必要であろう。

謝 辞

本研究は、科学研究費若手研究（A）「対人的文末モダリティに対する自発的反応の加齢変化：終助詞と対者敬語の相互作用」（課題番号：16H05940）および同挑戦的萌芽研究「終助詞の感受性に及ぼす対人調整能力の影響：事象関連電位による検討」（課題番号：24652080）の助成を受けて行われた。

引用文献

- Baayen, R. H.(2008). *Analyzing Linguistic Data: A practical introduction to statistics using R*. Cambridge University Press.
- Bates, D., Maechler, M., Bolker, B., & Walker, S. (2014). lme4: Linear mixed-effects models using Eigen and S4. R package version 1.1-6. Retrieved from <http://CRAN.R-project.org/package=lme4>Kuznetsova, Brockhoff, & Christensen, 2014
- 井上優 (1999). 「状況認知と終助詞：『ね』の機能」『日本語学』18 (9) : 79-86.
- 神尾昭雄 (1990). 『情報のなわ張り理論：言語の機能的分析』東京：大修館書店.
- 加藤重弘 (2004). 『日本語語用論の仕組み』東京：研究社.
- 木山幸子 (2005). 「日本語の雑談における不同意の相互作用」修士論文, 東京外国語大学.
- Kuznetsova, A., Brockhoff, P. B., & Christensen, R. H. B. (2014). lmerTest: Tests for random and fixed effects for linear mixed effect models (lmer objects of lme4 package). R package version 2.0-6. Retrieved from <http://CRAN.R-project.org/package=lmerTest>
- 益岡隆志 (1991). 『モダリティの文法』東京：くろしお出版.
- 中西泰洋 (1993). 「文末詞の待遇的な機能についての一考察」『神戸大学留学生センター紀要』1 : 77-94.
- 大石初太郎 (1983). 『現代敬語研究』東京：筑摩書房.
- 滝浦真人 (2005). 『日本の敬語論：ポライトネス理論からの再検討』東京：大修館書店.
- 滝浦真人 (2008). 『ポライトネス入門』東京：研究社.
- 時枝誠記 (1939). 「敬語法及び敬辞法の研究」『語文論叢』8. (時枝, 1975『文法・文章論』東京：岩波書店に

再録).

時枝誠記 (1951). 「対人関係を構成する助詞、助動詞」『国語・国文』20 (9). (時枝, 1975 『文法・文章論』東京: 岩波書店に再録).

佐久間鼎 (1952). 『現代日本語法の研究』東京: 厚生閣.

Martin, Samuel E. (1964). Speech levels in Japan and Korea. In: Dell Hymes (ed.), *Language in culture and society: A reader in linguistics anthropology*, 407-415. New York: Harper & Row.

Maynard, Senko K. (1993) *Discourse modality: Subjectivity, emotion and voice in the Japanese language*. Amsterdam: Benjamins.

注

- 1 例えば時枝 (1951) は、「ね」と「よ」を対立させて捉え、「ね」は聞き手を同調者としての関係に置こうとする表現、「よ」は話し手の意思や判断を強く押し付ける表現であると述べている。しかし、時枝 (1951) のように、「よ」と「ね」について相反する定義を与えた場合、それらの接続形「よね」の機能を説明することができなくなる。「よ」「ね」の各形式固有の機能が、接続形をなしたときにまったく消えたり変わったりすることはないはずである。益岡 (1991) は、終助詞の接続関係に着目し、そのシンタクスを手がかりに終助詞の機能を説明しようと考えた。その観点をさらに発展させ、「よね」は可能であるが「ねよ」は不可能であるという接続形のシンタクスを根拠に各終助詞固有の素性を定義したのが滝浦 (2008) である。
- 2 「かよ」という接続形も可能であるが、この枠組みからは話し手のマイナスとプラスが同時に起こり一見矛盾があるように思える。しかし、滝浦 (2008) によれば、例えば「こんなのありかよ」という発話において、まず「か」が命題にかかって判断を保留し、その後で「よ」がそれを含めた全体にかかって一方的言明をすると捉えれば、矛盾はないという。
- 3 1 会話内での話者同士の年齢差は 5 歳を超えないように設定された。

Modulation of interpersonal distance in spoken Japanese: Independent uses of addressee honorifics and sentence-final particles

Sachiko KIYAMA

Abstract

The current study examined the interaction between Japanese sentence-final particle (SFP) *-yo/ne/yone* that serve as addressee modality and addressee honorifics *-desu/masu/gozaimasu*, in association with the actual interpersonal relationships of participants in the conversation. An analysis utilizing linear mixed effects modeling of natural conversation data among young female native Japanese speakers revealed that Japanese SFPs are used more often with friends than with strangers. This preference had a stronger influence on the use of addressee honorifics, than actual interpersonal relationships did. Particularly, *-ne* and *-yone* were found to be more likely to occur in utterances without addressee honorifics than in utterances with them, whereas *-yo* seemed to be used independently of addressee honorifics.